

何も言わずにこの仕草をすると、「内緒だけどダメだね」という意味です。「このレストランの味はどう？」「まあまあだね」という具合に使います。

ちなみに人の言った事を引用する場合、両手の人差し指と中指で double quotes（引用符）を作って頭の左右で動かします。音声でやる場合は「quote なになに unquote」と言うので、時間を節約するために quote を身振りで代用してしまうわけです。話す人を視ていないと分からない仕草です。

上手に真似するにはよく視ることが必要です。話のうまい人は手の動かし方も上手です。自分でも大げさかなというぐらいやると英語ではちょうど良い身体表現になります。DVDやYouTubeを視るときは、俳優の口真似だけでなく体の動きも真似しましょう。

ただし日本特有の身体言語もあるので、他の国の人に理解してもらえない表現がどうか分からない時は、念のためその国の誰かに訊きましょう。例えば日本ではバツ印が否定を意味しするのに対して、アメリカではバツ印にダメという意味はありません。アメリカで否定を意味する仕草は、拳をにぎり親指を下に突き出す（Thumbs down）です。逆に親指を上に向ければ肯定の意味（Thumbs up）になります。

同様に「High five」は二人揃って向かい合って片手を上げ、広げた自分の手のひらで相手の手のひらをパンとたたくという仕草です。日本語の「ハイタッチ」に似ています。チームが成功したときの「やったぜ」という若者表現です。YouTubeにいくつも例があります。

《レストランでお勘定を頼むには「bill, please」と言います。このとき言いながら手のひらに架空のペンで何か書き込む仕草をすると誤解を避けられます。請求書の代わりにビールをもって来られると困りますよね。アメリカのレストランではたいていクレジット・カードで払うので、請求書にサインする仕草です。無難に「check, please」でも通じます。》

日本人どうしではあまり身振り手振りは使いません。でも他の国の人と話す時はそれでは不十分です。あるアメリカの心理学者は会話において人は「言語から2割、身体から8割」の情報を得ると報告しています。記者会見で下を向いて原稿を読むだけの人が多いのも日本特有です。たとえ原稿を読むのでも、各文の最後で顔を上げて自信のある表情を見せればその人の言葉は説得力を持ちます。英語を話す時は意識して身体言語を使う事が大切です。